

『問題＝物質となる身体』におけるジュディス・バトラーの系譜学的実践 —— 形相と質料の区分の系譜学

東京大学 青本 柚紀

本発表ではジュディス・バトラーの『問題＝物質となる身体』の第一部とくに第一章において、バトラーが質料と形相または言語と物質（＝身体）をめぐる伝統的な議論をいかに再構築ないしは再配置しているのかを示す。

ジュディス・バトラーはフェミニスト哲学における代表的な哲学者の一人である。ジェンダーないしはセックスの概念を抜本的に脱構築した初期の著作は、フェミニズムの金字塔とも言える仕事である。1993年の『問題＝物質となる身体』(Bodies that Matter: On the Discursive Limits of “Sex”)の第一部第一章は『ジェンダー・トラブル』(Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity) (1990年)に対してなされた、あらゆる物質性を言語的要素に還元してしまうものであるという批判への応答の性格が強い章である。したがって、この章で試みられることは第一に、物質の脱構築は物質という語の有用性を無に帰すことではないと示すこと、第二にしばしばフェミニズムの実践の基盤とされてきた身体の物質性が女性性の排除や価値剥奪を通じて構築されたものであることを示唆することである。

その際にまずバトラーが参照するのはアリストテレスとフーコーの「魂」への言及の比較であり、それは、プラトンの形相／質料論に関するイリガライの分析を批判しつつもその有用性を拾い上げるような批判的読解に転じてゆくのだが、これはまさにバトラーがその必要性を訴える「物質性の定式化の系譜学」である。先に示したバトラーの問題意識からしても、これらの分析は『ジェンダー・トラブル』執筆の前後からバトラーが試みているジェンダーの系譜学に連なるものである。

質料と形相は精神と身体の関係と類比的に捉えられてきた。そして、精神が男性的なものに、身体が女性的なものに結びつけられ、後者が劣位に置かれていたことは Korsmeyer (2004) Gender and Aesthetics: an Introduction で指摘されるとおり、フェミニスト的観点から問題にされてきた。また、この質料と形相を区別し、そのうえで一方を他方の劣位に置く伝統的価値観に対しバトラーは、形相がそのような劣位に置かれる「外部」として質料を構成することによってその地位を安定させていること——すなわち、それが質料を構成する際の排除に根本的に依存していることを看破する。そしてそれは前述のように質料と形相の二項対立が精神と身体、男性と女性の二項対立に重ね合わせられてきたことを踏まえれば、ジェンダーやセクシュアリティの統制が質料と形相の分節化に際して機能しているということである。

本発表では Salamon (2010) Assuming a Body: Transgender and Rhetorics of Materiality などの先行研究を参照しつつ、『問題＝物質となる身体』第一部第一章における系譜学的実践の詳細を検討する。そして、それを通じて質料と形相をめぐる伝統的な二項対立をバトラーがいかに脱構築しているのかを明らかにする。